

白樂天が長詩の二大傑作の『長恨歌』と『琵琶行』なるは、人の治く知る所なり。『長恨歌』、樂天三十五歳の宮廷勤務の折りの作なるに對し、『琵琶行』、四十五歳にして、都より遙かに遠き長江の岸に左遷せられたる間の作なれば、『長恨歌』に比し陰翳濃く、情趣亦深し。今の九江を訪ぬる人、長江岸より水中に建つ亭に渡れば、毛澤東の『琵琶行』全文を筆寫せるを石に彫りて掲ぐるを見る。毛、『琵琶行』を殊の外愛好せしや。或いは九江を訪づる者に、必ず『琵琶行』を想起せしめん國民教育が爲なりや。

琵琶行 并序

元和十年、予左遷九江郡司馬、

明年秋、送客湓浦口、

聞舟船中夜彈琵琶者、

聽其音、錚錚然有京都聲、

問其人、本長安倡女、嘗學琵琶

於穆曹二善才、年長色衰、

委身爲賈人婦、遂命酒

使快彈數曲、曲罷憫默、

自敘少小時歡樂事、

今漂淪憔悴、轉徙於江湖間、

予出官二年、恬然自安

感斯人言、是夕始覺有遷謫意、

遷謫因爲長句歌以贈之、

凡六百一十二言、命曰琵琶行

元和十年、予九江郡の司馬に左遷せらる。明年の秋、客を湓浦の口に送り、

舟船の中に夜琵琶を弾く者を聞く。其の音を聴くに、錚錚然として京都の聲有り。其の人に問へば、本と長安の倡女にして、嘗て琵琶を

穆と曹の二人の善才に學ぶ。年長け色衰え、

身を委ねて賈人の婦となると。遂に酒を命じて、快く數曲を彈ぜしむ。曲罷みて憫默

し、自から少小時の歡樂の事と、今は漂淪憔悴して、江湖の間に轉徙することを敘ぶ。

予官に出づること二年、恬然として自から安んずるも、斯の人の言に感じ、是の夕始めて

遷謫の意有るを覺ゆ。因りて長句の歌を爲り以て之に贈る。凡そ六百一十二言、命けて琵琶行と曰ふ。

(序の大意)元和十年(皇帝は玄宗の五代後の憲宗、日本で云へば嵯峨天皇の弘仁六年、西暦八一五年)、予は九江郡(今の名も九江、但し唐以降は「江州」と呼ばれたことが多い)の司馬(實権の無い副知事の職)に左遷された。その翌年の秋、客人を長江岸の湓浦の口に送ると、近くの舟から夜琵琶を弾く音が聞こえた。聴くと、都風の澄み切った音である。演奏者に問ふともと長安の藝者であり、昔琵琶を穆と曹の二人の師匠に學んだが、年とつて容色が衰へたので、商人の妻になったといふ。そこで酒を注文してそそくさと數曲弾かせた。演奏が終ると悲しげに押し黙っていたが、やがて自分から語り出す。若い頃の何と楽しかったこと。今は流浪の生活に身もやつれて、河と湖を舟でさすらふばかりと。予はこの地で官務に就くこと二年、心の平静を保って來たが、この人の語る言葉に動かされ、この夜始めて、自分もこの地に左遷されて來てゐると痛感した。そこで長い七言の歌を作つて、この人に送つた。全部で約六百一十二言、題は『琵琶行』。

琵琶行（一）

琵琶行（二）

潯陽江頭夜送客

潯陽江頭 夜客を送る

楓葉荻花秋索索

楓葉荻花 秋索索たり

主人下馬客在船

主人馬を下り 客は船に在り

舉酒欲飲無管絃

酒を舉げて飲まんと欲すれど 管絃無し

醉不成歡慘將別

酔うて歡を成さず 慘として將に別れんとす

別時茫茫江浸月

別るる時 茫茫として江月を浸す

（詩の大意）潯陽江のほとりに、夜客を送った。楓の葉は色づき、川岸に荻の花が咲き、索漠とした秋の気配である。主人が馬を下りると客は船の中に居る。酒杯を挙げて飲もうとするけれども、音楽を奏する者が居ない。これでは酒に酔っても心は晴れない。惨めな気分のまま客人と別れることになった。別れるとき茫茫と廣がる大河に月が沈んでゐる。

（平成三十一年一月八日受附）